

古典に親しむためのアプローチ

上川 寛子

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: hi_kamikawa@tottori-u.ac.jp

Hiroko KAMIKAWA (Tottori University Junior High School): An approach to get familiar with classics literature

要旨 — 平成 29 年に告示された中学校学習指導要領では、「古典に親しむ」ことが各学年の指導事項に盛り込まれている。小学校から古典の学習に親しんできた生徒が古典の世界について新たな興味・関心を喚起し、古典に親しむ態度を養うことが重要である。本実践では、生徒個々が古典を自分に必要なもの、自分と関わるものとして受け取ることが古典に親しむことにつながると考え、古典の面白さ、魅力を引き出す活動を探っていくことをねらいとした。事後アンケートからは、文章の内容を様々な角度から考えていくことで、見方が広がることに魅力を感じたり、古文の中の考え方が現代にも通用することに面白さを感じたりする様子が見られ、自分に関わるものとして捉えることで古典に親しむことができると考えられる。

キーワード — 古典に親しむ, 竹取物語, 宇治拾遺物語

Abstract — The junior high school curriculum guidelines announced in 2017 include "getting familiar with the classics" in the guidance items for each grade. It is important for students who have been familiar with learning classics from elementary school to invoke new interests in the world of classics and to nurse an attitude in favor of classics. The aim of this practice was to explore activities that bring out the fun and charm of the classic, under the premise that each student receiving the classic as something they needed and related to themselves would lead to familiarity with the classic. The post-questionnaire revealed that the students were able to raise their interest in classics by understanding that ideas expressed in the classic texts are still valid also in modern times, or by broadening of perspective appeals to students by analyzing the text content variously.

Key words — Getting familiar with the classics, Taketori Monogatari, Uji Shui Monogatari

1. はじめに

1.1. 問題の所在

平成 29 年に告示された学習指導要領では、現行の学習指導要領に引き続き、伝統文化に関する学習を重視することが述べられている。小学校では低学年から古典の学習が系統的に行われており、生徒はすでに古典にふれあう機会を持っている。古典を学習する前の生徒の言葉からも、古典教材の名前がいくつか挙げられ、身近なものとなっている様子が見られる。事前にとったアンケート(図 1)では、古典が好きな理由として「今と違った昔の言葉に触れられること」を挙げている生徒が一番多く(62 人)、次いで「話の内容がおもしろい」(30 人)、「昔の文化・生活・考えが分かる」

(17 人)と、半数近い生徒の興味は、用いられている言葉に向けられている。一方で、苦手と感じている点については、「言葉の意味が難しい・分からない」(68 人)、「読み方が難しい」(32 人)「内容が捉えづらい」(14 人)とあり、言葉や文章の内

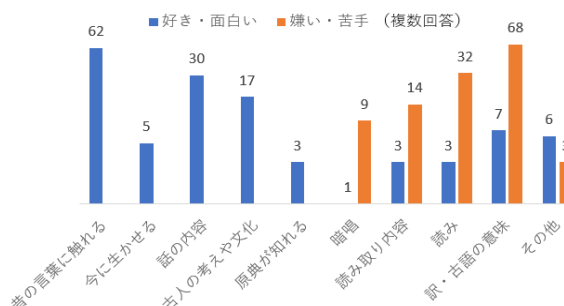


図 1 古典の学習で好き・苦手なところ

容に踏み込んだものが増えている。また、「古典の学習は好きですか」という質問に対しては、以下のような結果が返ってきた(表 1)。

表 1 古典の学習に対する意識(事前)

138人中	好き	どちらかというが好き	どちらかと言えない	どちらかというと嫌い	嫌い	無回答 欠席
授業前	25	76	3	26	4	4

「好き」「どちらかというが好き」を合わせると 101人(138人中)になり、内容理解に対する難しさを感じてはいるものの、多くの生徒が古典の学習を肯定的にとらえている。アンケートには「言い方は難しいけどお話自体はすごくおもしろい」という記述も見られた。これらのことを鑑みても、中学校の古典学習の開始にあたり、小学校から親しんできた様々な古典の作品と結びつけることで、古典の世界についての新たな興味・関心を喚起し、古典に親しむことが大切であると言える(文部科学省 2017)。

1.2. 研究のねらい

坂東(2010)は、中学生が古典の授業を嫌う理由のうち、「何のために学習するのかよくわからない」「現代の生活とかけ離れていて実感がわかない」という2点が古典学習指導の本質的な課題であり、古典と自己との関わりを意識化する学習のあり方を明らかにすることの必要性を述べている。自身のこれまでの取り組みの中でも、古典を学習する際に、なぜ古典を学ぶ必要があるのか、と疑問を口にする生徒もいた。古典に親しむためには、古典を自分に必要なもの、自分と関わるものとして捉えさせる必要がある。

中学1年生でまず出会うのは、千年以上も前に作られた「竹取物語」である。それが、現代まで語り継がれているのは、その時代ごとに楽しまれ尊重されてきたからであろう。竹村(2002)は古典を「時世を経て清新な魅力と豊かな創造的契機を失わないもの」と言い、この「清新な魅力と豊かな創造的契機」を発見していく読書体験に裏打ちされるものが「古典に親しむ態度」であると述べている。

さらに、小川ら(2020)は竹村の言葉を引用し、学習者が古典作品を内容理解や文法や古語の意味などの知識の習得だけにとどまらず、作品としての価値を見出すこと、つまり作品観の形成をすることが「古典に親しむ」ことだと述べている。

本実践では、古典を現代においても読む価値があるもの、自分と関わるものと捉えられるよう、新たな見方を獲得したり現代とつながるものとして読んだりできる活動の工夫を行う。それが古典の魅力となり、生徒の「面白い」「読みたい」と思う気持ちを引き出すのではないかと考えている。そして、生徒の感想からその効果を確認することをねらいとする。

2. 授業の実際

2.1. 「竹取物語」での実践

2.1.1. 問いの設定

「竹取物語」は、「かぐや姫」として幼い頃から親しまれている物語である。それ故生徒は「竹取物語」に親しみを感ずるかもしれない。しかし、竹村は、「竹取物語」と「かぐや姫」の近縁性を出発点に授業を行うことで「竹取物語」を非現実的な空想物語として矮小化する危険性があると述べている。「竹取物語」は人間世界の真実を述べる物語である。とすると、「かぐや姫」の延長ではなく、改めて古典としての「竹取物語」の面白さを追求していくべきではないだろうか。

「かぐや姫」を「竹取物語」と比較すると、その内容は省略されている部分も多く、「竹取物語」の面白さをすべて伝えられるものにはなっていない。そこで、教科書掲載の原文とあらすじを読み、生徒が初めて知ったこと、驚いたこと、不思議に思ったことなど「竹取物語」を読んで印象に残った部分について考えさせる問いを設定することとした。ワ

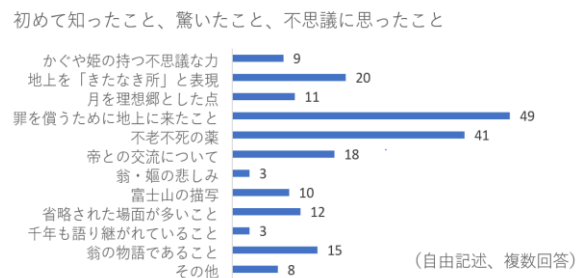


図 2 「かぐや姫」との違いなど初発の感想

ークシートの記述(図 2)からは、かぐや姫が罪を償うために地上の世界に来たこと、不老不死の薬を置いていったこと、地上を「きたなき所」と表現したことなどに着目した意見が多く見られた。

そこで、ワークシートの結果から、「かぐや姫」にはない場面設定の意図や効果など、物語を外側から捉え様々に思考させられる問いを設定することとした。主な問いと活動は、次のようなものである。

①「当時の人にとって、月の世界はどのようなものであったか」

「月の世界」と「地上の世界」を比較することで、「月の世界」を理想の世界とした当時の人々の思いを考える。

②「なぜ地上で過ごすことが罪を償うことになるのか」

かぐや姫と周りの人々との関わりを捉え、かぐや姫の罰について考える。

③「当時の人が大切にしているものは何だろう」

かぐや姫と別れた後の翁・姫、帝の思いを考え、当時の人々が大切にしたものを考える。

2.1.2. 活動の実際と生徒の反応

活動①では、月の世界と地上の世界の違いを表にまとめ、月の世界が理想の世界となった理由に目を向けさせた。月の都の人はとても美しく、年をとることも悩むこともない。それに対して地上の世界に生きる人間は、日々の生活の中で様々な物思いに苦しめられ、病気や老い、死を恐れながら生きていく。当時の生活を考えると、月が地上の人間の憧れる理想的な世界となっていることも納得がいく。しかし、月の世界は本当に理想的な世界かどうか、自分たちの価値観で考えさせた。全体で意見を共有していく中で、「感情がないと楽しみもない」「死があるからこそ、人生が楽しくなるのではないか」「悩みがあるとしても感情がある方がよい」など、有限な人生だからこそ充実させることもできるという考えを確認した。現代の私たちのこの考え方が、当時の人にも通じるのか考えながらその後の文章を読んでいくことを確認した。

活動②では、五人の貴公子の求婚を断っていたかぐや姫が帝と歌を詠み交わす関係になっていったことや、別れの場面で、翁・姫を思いやり心

が苦しめられている様子を読み取った。これは、物思いのない月の人であるかぐや姫の感情が、周りの人との交流により人間らしくなっていったことを表している。生徒は、感情を持ち、人々への思いに苦しんでいるかぐや姫の様子から、それこそが物思いのない月の住人にとっては、罪を償っていることになるのではないかと考えた。罪を考えることで、改めて感情に目を向けられたようである。なぜ地上で過ごすことが罪を償うことになるのか。これまで多くの人が論じてきた問いを、生徒も自分なりに論じようとする姿が見られた。

活動③では、かぐや姫が月に帰った後の場面を扱った。絵本ではあまり語られていない部分であり、生徒も着目した部分である。翁・姫の悲しみや、帝が不老不死の薬を焼いた理由を考えることで、大切な人に対して抱く情愛を捉えることができた。これは、活動①で捉えた自分たちの価値観と通じる部分でもあることを確認した。また、「竹取物語」を「竹取の翁の物語」と見る見方もあり、「竹取の翁が主人公だとすると、翁は体験したことからのようなことを感じただろう」と投げかけた。グループでの交流にとどめ、全体での答えの確認はしていないが、違った視点から物事を見る見方を提示することにはつながるのではないかと考えられる。

以上のように、答えのない問いも交えながら、生徒が思考できる場面を設定した。図 3 は「かぐや姫」と「竹取物語」の面白さについて記述した内容をまとめたものである。事前に記述したアンケートから、昔話「かぐや姫」については、かぐや姫が月から来たことなど現実とかけ離れた設定(①不思議さ・独創性)や、竹から生まれて月に帰って行ったという展開(②物語の展開)などストーリーを楽し

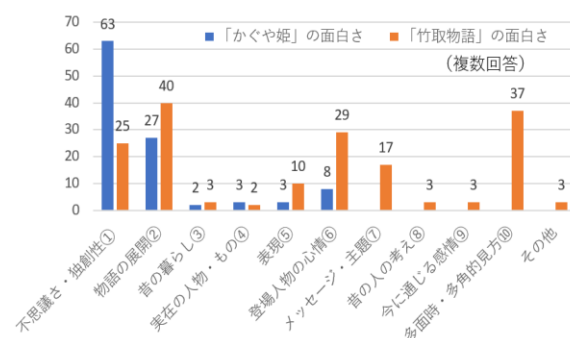


図 3 物語のおもしろさ(自由記述)

んでいる様子が見てとれる。

一方、「竹取物語」の学習を終えた後では、多いものから②物語の展開や設定の面白さ(40人)、⑩多面的・多角的な見方で物語の内容を読み取っていくこと(37人)、⑥登場人物の心情を考慮すること(29人)、⑦メッセージ・主題を考慮すること(17人)などに面白みを感じている。物語の展開については、構成や設定の巧みさなども含まれており、着目の仕方は「かぐや姫」の時とは変化している。そして、心情をより深く読み取ったり、作品の主題や文章に込められたメッセージなどを、様々な視点で考えようとしたりするところに面白さを感じているのが分かる。

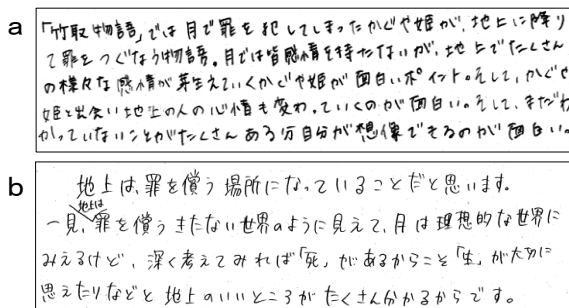


図4 「竹取物語」のおもしろさ

図4は生徒のワークシートの記述である。aの記述からは、心情の変化を捉えていく中で、読み物としての面白さを見いだしていることが分かる。また、bの記述からは、地上が罪を償う場所であるという設定を取り上げ、月との比較の中で有限である地上の世界の良さを読み取ることに面白さを感じている。授業で面白かったところを聞いた感想でも、音読や現代語訳などに加え、「1回読んだときにイメージしたストーリーが、2回目では、違うストーリーになっていたところ」「今まで知っていたかぐや姫と違う部分があって新たな発見がたくさんでき、面白かった」とあり、読みの深まりが古典の面白さを引き出したといえる。このように、多面的に考えていくことが新たな見方を獲得することにつながり、古典の面白さを引き出すと考えられる。

2.2 「宇治拾遺物語」での実践

「宇治拾遺物語」は「今昔物語」と並ぶ代表的な説話集で、人間や社会への鋭い批評に特徴があ

る。教材「とらわれた心に突き立つ矢」では、長年、修行を積んできた聖の前に、象に乗った普賢菩薩が現れる。聖はそれを信心のおかげだと拝み入るが、獵師は自分の目に見えるのは「心得られぬことなり」と思い、矢で射て正体を見破るのである。文章の最後には「聖なれど、無知なれば、かやうに化かされけるなり。獵師なれども、慮りありければ、狸を射殺し、その化けを表しけるなり。」と語り手の批評が述べられている。本実践では、自分と関わるものとして古典を捉えることをねらいとしている。そこで、鎌倉時代に成立した「宇治拾遺物語」においても、現代に通じるものがないか生徒に考えさせることとした。

授業では、歴史的仮名遣いの確認、音読練習、現代語訳の確認を随時行った。現代語訳に関しては、教師が基本的な古語の意味を示し、自分たちでおおよその意味の確認をしている。その後、聖と獵師を対比させて「無知」と「慮り」がそれぞれどのような事を指すか確認し、最後に「とらわれた心」に当てはまる具体例を考えていった。

生徒は「とらわれた心」が指す内容を、文章中の例を用いて答えることはできる。しかし、どのようなことが当てはまるか抽象化して考えることになることと答えられなくなる。文章から受け取ったことを自分の言葉で捉え直し、自分の経験と重ねて考えることは生徒にとって難しい作業であるようである。そこで、日々の授業では、簡単な言葉でよいので自分の言葉で説明したり、身の回りの体験から当てはまりそうなことを考えたりする活動を取り入れている。

今回の授業でも、聖と獵師の姿から「無知」が「熱心に修行し、疑わないこと」で、「慮り」は「疑うこと」という説明で納得している生徒の姿があった。しかし、そのような解釈では、語り手からのメッセージを「何事も疑うことが必要」と考え、ただ単に疑えばよいのだと捉えてしまう危険性がある。文章中の一事例を用いて説明するだけでは本当の理解に届かないのである。

改めて、「無知」と「慮り」を抽象化し、自分の言葉で考えさせると次のような意見が出た。

無知…思い込み過ぎること

自分の知識だけで考えること

- 狭い視野で物事を見ること
- 自分を信じすぎること
- 一面的に見ること
- 慮り…自分の見たことを信じて自分で判断すること
- すべて信じるのではなく、疑ってみること
- 広い視野で見ること
- 冷静に考えること
- 多面的に見ること

これらの意見から、「慮り」が「物事を多面的に判断し行動すること」であることが捉えられている。そこで、「無知」であることがよくない結果につながる例として、「とらわれた心」の具体例を考えさせた。

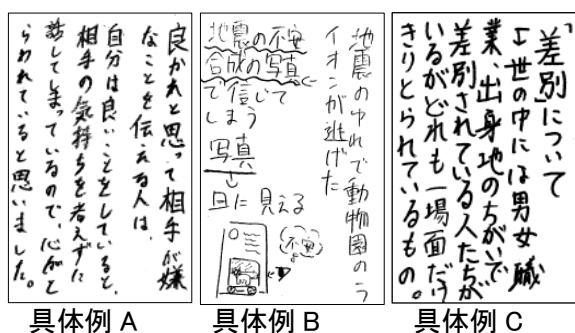


図 5 「とらわれた心」の具体例

図 5 は、生徒が考えた具体例である。

具体例 A は、自分にとって身近な友達との関わりについて振り返り、その中で起こりがちな行動について取り上げている。人間関係においても、「とらわれた心」で行動すると問題が生じると考えた例である。

具体例 B は、実際に起こった地震の時にインターネット上で流された嘘の情報について取り上げたものである。様々な情報が渦巻く現代社会で起こりがちな問題を取り上げた例であり、不安や作られた情報が自身の判断を誤らせると述べている。

具体例 C は、解決すべき社会の問題である差別について述べたものである。全員で意見を共有し、一面だけ見て差別を行ったり、自分で判断することなく間違った行動をそのまま継続したりするのが「とらわれた心」であり、現代にも通じる心だと確認することができた。

生徒からは、「電気のスイッチがこわれていると思って押していたら、コンセントが抜けていた。」と

いった日常の生活の中の出来事や、具体例 B のように現代の生活でとらわれやすい思い込み、具体例 C のように社会の問題となっているものなど様々な事象について意見が述べられた。いずれにしても、鎌倉時代に書かれた言葉が、現代の私たちの問題にも当てはまるのが分かる。むしろ、情報にあふれる現代でこそ非常に重要なことであると言えるかもしれない。このように、古典の言葉を現代の例と関連させて考えさせることで、古典が現代にも通用するものだと捉えることにつながり、古典を自分と関わるものとして受け入れるのではないかと考えられる。

3. 考察

本実践では、新たな見方を獲得したり現代とつながるものとして読んだりできる活動の工夫を行い、生徒が古典に面白さを感じることをねらいとして実践を行った。図 6 は授業前と授業後にとったアンケートの結果である。「好き」「どちらかという好き」と答えた生徒は 8 人増えただけであるが、好きと答えた理由(図 7)を見てみると、事前アンケートでは多くの生徒が言葉の響きなど昔の言葉に触れることに面白さを感じていたのに対し、学習後は、歴史的仮名遣いを知って読めるようになった

古典の学習は好きですか。

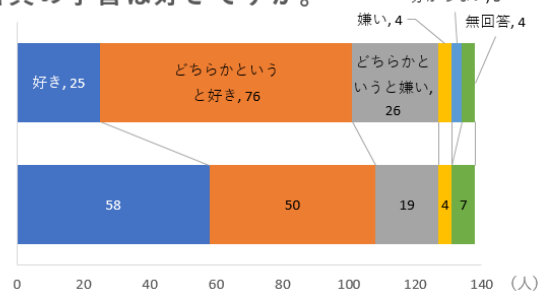


図 6 古典に対する意識(比較)

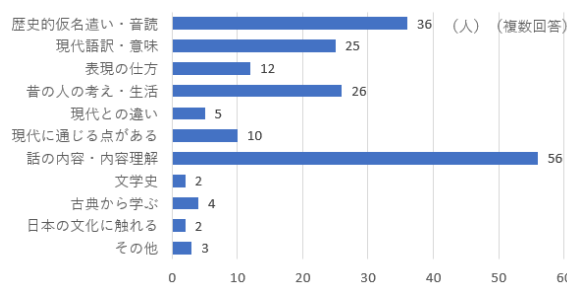


図 7 古典が好きな理由

ことや、内容を読み深めたことに関する面白さに変わってきている。

以下は、好きな理由を記述したものである。

- ・昔の物語を読むことによって、「とらわれた心に突き立つ矢」のように自分を振り返れたり、なるほどと思えるところがあった。
- ・お話のストーリーはおもしろく、勉強するのも楽しかったです。昔の人々の思いや筆者の願い、主張がこめられており、古典は奥が深いなあと思いました。
- ・今の情報も大切だけど、古典を読むことにより、昔の人の考えを知ることができたり、これからの生活に生かせるようなことが学べて楽しかったです。
- ・聖と獵師の体験から得る教訓が、イソップ童話のように入っていて、考えさせられる内容で面白かった。
- ・今まで古典にそこまで興味がなくて読んでいなかったから、今回の体験はとても新鮮で面白かったです。特に今の人と昔の人は考え方が違って、そこを見つれたり、逆に同じところを見つけるところも楽しかったです。

今回の授業では、なぜそのような設定になっているのか、自分たちに当てはまることはないかと視点を変えて内容を捉えていくことに留意した。その中で、生徒は新たな発見を楽しんだり古典の意義を考えたりしたようである。

事前アンケートでは「嫌い」「どちらかという嫌い」「分からない」と答えていたが、事後アンケートで「好き」「どちらかという好き」に変わった生徒が19人いる。「古典は今まであまり読んだことがなくて少し抵抗があったり不安だったけど、学習してみると物語の内容も面白くてとても興味が出てきました。」「昔の言葉・表現に触れることによって1つのことをいろいろな方向から考えることができるようになることが分かりました。」など、古文の言葉の難しさは感じるものの、内容に対する面白

さを感じている。また、「違う古典を読んでみたくなった」と興味を示した生徒も15人おり、多面的に内容を捉えたり、現代に通じる部分を考えたりすることで古典に親しもうとする態度の育成につながったと考えられる。

4. まとめと今後の課題

文法的な問題や、歴史的仮名遣い、古語の難しさから古典に対して難しさを感じてしまう部分は残したが、様々な視点で文章の内容を読み進めたり、現代とのつながりを考えたりする中で、古典を楽しむ姿が見られた。古典で面白かったところについて、ある生徒が「より疑問が浮かぶところ。それを自分なりに解決するところ」を挙げている。このように、自分で問いを持ち、それに答えながら読み進められる生徒の姿が、本校の研究テーマとなっているやりくりしていくことのできる生徒といえるだろう。今回の実践では、文章の内容について、一部分だけ読み深めていったに過ぎず、生徒それぞれが面白さを感じた部分も様々であることから、授業で構成したどの部分が効果的であったのか明確ではない。今後は、より主体的な読み手を育てるために、どのような指導をしていくのが効果的であるか探っていきたい。

参考文献

- 小川愛美・佐藤多佳子(2020)『竹取物語』における作品観の形成を促す学習デザイン. 上越教育大学教職大学院研究紀要 7. pp.105-115
- 竹村信治(2002)翁の物語としての『竹取物語』—「古典」に親しむ"ために—. 国語教育研究(45). pp.68-81. 広島大学教育学部光葉会
- 坂東智子(2010)自己との関わりを意識化する古典学習指導の考察--大村はまの単元学習指導「古典入門--古典に親しむ」(昭和25年)を中心に. 教育実践学論集(11). pp.83-95
- 文部科学省(2017)中学校学習指導要領解説国語編